

一九三九年、山梨県生まれ。七十一年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長・学長・総長などを経て、二〇一五年十一月より現職。

土屋高徳さんのこと

ヤオハンの和田一夫さんが逝去された。和田さんは熱海の八百屋から業を始め、ブラジル、香港、中国、東南アジアへとスーパー、百貨店など日本の流通業の海外進出の先駆けとなつた。ヤオハンが進出した国の数は一六。ダイエー、イトーヨーカドー、西友など国内大手に抗して業態を拡大するには海外進出しかないと和田さんは考えたようだ。

一介の八百屋から始め急速な勢いで展開した海外事業である。進出先国多くの幹部を一つの理念のもとに凝集していくのは容易ではない。「会社が大きくなればなるほど私の思いが社員に伝わらなくなれる」と和田さんは述懐していた。幹部を一堂に集めての研修に和田さんは随分と力を入れた。研修事業を全面的に任せられたのが、創業以来の友であり部下でもあつた土屋高徳さんである。和田さんは、谷口雅春の生長の家の教えに深く帰依していた。生長の家の道場が河口湖のほとりにあって、そこで開かれた研修会の講師として招かれたことがある。

土屋さんはその時に初めてお会いしたのだが、

お人柄に私が惹かれて長いお付き合いとなつた。和田さんは土屋さんのことを「一六ヶ国もの國の社員教育を担当し、社員一人一人に私の夢を伝える伝道者として活躍してくれた」といつていた。ピーカオブピーカの和田さんの豪邸での一夜、ビクトリアハーバーのクルージングなど、私などにはあるまじき贅沢をさせてもらつた。当時、アジア最大規模を誇った上海ヤオハンの開業式典に招いてもくれた。

そんな思い出を綴つた弔電を送つたところ、土屋さんから丁重な返信をいただいた。その最後に、「五〇年間保障を約束された一国一制度が返還後、二〇年で暗礁に乗り上げ、紛争の坩堝と化し、予想もしなかつた対立で混乱を招き、かつて黄金の卵であった香港の長所が活用されず市政府と市民が対立、流血の惨事を巻き起こしている現状を見聞し、誠に断腸の思い残念でなりません」と記されてある。

香港と中国に熱い情熱を注ぎ込んできた和田さんと土屋さんことを知つてゐる私には、「残念でなりません」の一語の気持ちが痛いほどよく伝わる。